平成２０年度文部科学省委託事業

総合的な放課後対策推進のための調査研究

放課後活動支援モデル事業　報告書

＜事業テーマ＞

大都市近郊ベットタウンのオープンスペース

都市公園、商店街を活用した子どもの居場所づくり

平成２１年３月

船橋行田放課後対策実行委員会

目次

１事業概要・・・１

１－１事業のテーマ
１－２事業の目的
１－３事業の実施内容・方法
１－４事業の効果・成果
１－５事業実施日程
１－６事業の実施体制

２実施プログラム報告・・・6

三世代交流広場　プログラム①
遊びの技の見本市
・ 紙飛行機、ﾍﾟﾝｼﾙﾊﾞﾙｰﾝ、剣玉　プログラム②
・ 長縄とび、王取り、凧、剣玉　プログラム③
・ 生き物観察、簡易測量、凧、ベーゴマ　プログラム④
・ Ｓケン、元大中小、ねんぼ、やっとこ　プログラム⑤
協働イベント
・ 協働りバザー　プログラム⑥
・ 餅つき大会　プログラム⑦
子どもモノづくりマイスター養成塾　プログラム⑧
地域文化の伝承会
・ 布ぞうり　プログラム⑨
・ たくあん干し　プログラム⑩
・ たくあん漬け　プログラム⑪
・ 書初め　プログラム⑫
・ 房総太巻き　プログラム⑬
・ あんこう吊るし切り　プログラム⑭
フィールド活動(昨年度に引き続いて実施、今年度調査研究対象外)
・ デイキャンプ　プログラム⑮
・ 稲作　稲刈り　プログラム⑯
・ 稲作　脱穀　プログラム⑰

問合せ先・・・24

1 事業概要

1　事業のテーマ（調査研究テーマまたはモデル事業名を完結に記載すること。）

大都市近郊ベットタウンのオープンスペース（都市公園、商店街）を活用した子どもの居場所づくり

2　事業の目的

継続的に放課後対策を実施していくための仕組みを地域に根づかせる。 昨年度の本事業で、退職し地域に戻ってきた熟年世代の方々(旧住民)で、子どもたちの放課後をサポートする組織ができ、子育て中の親（新住民）とも連携がとれるようになり、「子育てネットワーク」ができつつあった。今年度は、このネットワークをさらに発展させ、より多くの人が参加しやすいオープンスペース（都市公園、商店街）を活用し、子どもを真ん中に置いて新住民と旧住民が交流する放課後の子どもの居場所をつくりことを目的とした。

3　事業の実施内容・方法

街の中心にある都市公園、商店街は人の往来も多く、注目度も高く、誰でも接することができる。このようなオープンな場でオープンな機会づくりを行い、少しずつ担い手の主体性を醸成し、つながりを確かなものとしつつ関わる人の輪を広げた。

■都市公園（千葉県立行田公園）での実施内容

①「遊びの技（わざ）の見本市」の実施

むかし遊び（剣玉、ベーゴマ、ねんぼ）、つくり遊び（紙ひこうき、ﾍﾟﾝｼﾙﾊﾞﾙｰﾝ、凧）、集団遊び（Ｓケン、元大中小、王取り、）、体を使ったあそび（長縄とび、やっとこ）などの遊びの技（わざ）を披露するブース方式の見本市を４回開催した。専門家を招致すると同時に、住民からも遊びの技（わざ）の提供者を募った。遊び方を知らない子どもや保護者が、公園での遊び方を知る機会とした。

②「体をつかって外遊び」をテーマに「三世代交流広場」の開設

毎週２回（水曜日の放課後と土曜日の午後）にドッチビー、竹馬、ゴムとび、竹とんぼ、など、体を動かして外で遊ぶ機会をつくった。運営スタッフは、熟年世代の放課後サポーターの方々が勤めた。土曜日は、親子で参加する方が多く、各家族の親子が熟年世代の方々と知り合う機会になった。また、親にとっては、自分の子ども以外の子どもと遊ぶ、または他の親とも一緒に遊ぶという経験をする場にもなった。

■商店街（行田団地商店街）での実施内容

行田団地商店街にある行田ジャングルクラブの１階オープンスペースおよび商店街の広場で実施

①地域文化の伝承するための実習教室の開催

わらじづくり、たくあんづくり、房総太巻き、あんこうの吊るし切りの実習教室を開催した。一昔前は多くの人ができていたものが今はできる人が少なくなっている。親子参加はもちろんのこと、大人だけの参加も募り実施した。

②子どもモノづくりマイスター養成塾の実施

子どもモノづくりマイスターとは、モノづくりの手技（てわざ）の基礎を身につけ、遊び道具をつくれる子ども。一言で言えば「小刀が使える子ども」のこと。紙ヤスリホルダー、工作台、ノコギリの柄など自分が使う道具の製作からはじめ、凧、竹箸、竹とんぼ、枝笛、竹笛、道具箱を製作する 10 会合の講座を開催した。

③協働イベント

各団体持ち寄りのバザーと餅つき大会を実施した。餅つき大会では、地域内にある相撲部屋の力士に来ていただいた。

■船橋市との連携

船橋市では、毎月第３土曜日に各公民館で、放課後子ども教室を実施するが、最寄りの公民館である塚田公民館の事業の一部を当実行委員会で担当した。

■放課後子ども教室と放課後児童クラブの連携と棲み分け

本実行委員会を、地域子ども教室を実施していた民間団体（船橋自然体験クラブ）、学童保育を実施している民間団体（行田ジャングルクラブおよびそのＯＢ会）、公設学童保育の父母会（行田西小学校放課後ルーム父母会，行田東小学校放課後ルーム父母会，法典西小学校放課後ルーム父母会）、保育園父母会（行田保育園父母会）で構成し、放課後子ども教室と放課後児童クラブの両方の主体が役割を分担し推進した。

4　事業の効果・成果

■地域における定番化

地域の中心にある都市公園というオープンスペースで 2 年間続けたことによって「水曜と土曜の放課後は行田公園での外遊び」は地域の定番として認知されるようになった。それによって、遊びや文化の提供者が自分から名乗り出てくるようになった。また、遊びに出す保護者の安心感も高くなった。

■地域文化の伝承

知っている、見たことがあるというだけでなく、やったことがある、できるというレベルで文化を伝えていく場をつくることができた。

遊びの文化（ベーゴマ、剣玉、ねんぼ、凧、元大中小、Ｓケン、やっとこ）

生活文化（たくあん、房総太巻き、あんこう吊るし切り、ぞうりづくり）

■手技（てわざ）の復興

10 会合連続参加の工作教室「子どもモノづくりマイスター養成塾」を行ったことで、参加した子どもたちは少しずつ手技を身につけていった。小刀やのこぎりな

どの刃物の使い方は子ども自身も上達していることを実感でき、テレビゲームに代表される刹那的な遊びとは違い、五感を駆使し時間をかけてじっくり取り組む「手技」の面白さが伝わった。

5　事業実施日程

実施内容	実施日
「体をつかって外遊び」をテーマに三世代交流広場	＜以下水曜、土曜　51回＞ 9月／3日　6日　10日　13日　17日　20日　24日　27日 10月／1日　4日　8日　11日　15日　18日　22日　25日　29日 11月／1日　5日　8日　12日　15日　19日　22日　26日　29日 12月／3日　6日　10日　13日　17日　20日　24日 1月／14日　17日　21日　24日　28日　31日 2月／4日　7日　14日　18日　21日　25日　28日 3月／4日　7日　11日　14日　18日
遊びの技の見本市 ・　紙飛行機、ﾍﾟﾝｼﾙﾊﾞﾙｰﾝ、剣玉 ・　長縄とび、王取り、凧、剣玉 ・　生き物観察、簡易測量、凧、ﾍﾞｰｺﾞﾏ ・　Sｹﾝ、元大中小、ねんぼ、やっとこ	 10月25日 12月13日 1月24日 2月21日
子どもモノづくりマイスター養成塾	＜以下土曜　10回＞ 12月6日、12月13日、12月20日、1月17日、1月24日、1月31日、2月14日、2月21日、2月28日、3月7日
地域文化の伝承会 ・　布ぞうり ・　たくあん ・　書初め ・　房総太巻き ・　あんこう吊るし切り	 8月23日 12月23日 1月5日 2月28日 2月28日
協働イベント ・　協働バザー ・　餅つき大会	 11月2日 2月1日

6　事業の実施体制

（1）団体の構成

氏　名	職　名	当事業における担当内容
東田　成	NPO法人行田ジャングルクラブ理事	実行委員長
安次富　亨	法典西小学校放課後ルーム父母会長	副実行委員
條　冬樹	NPO法人行田ジャングルクラブ理事長	実行委員
生島　潤	〃　副理事長	実行委員
樋口澄則	〃　事務局長	実行委員
広野　章	行田ジャングルクラブＯＢ会会長	実行委員
石坂はるか	行田西小学校放課後ルーム父母会長	実行委員
市川千登世	行田東小学校放課後ルーム父母会長	実行委員
大矢亜由美	行田保育園父母会会長	実行委員
栗原　潔	船橋自然体験クラブ代表	実行委員
佐藤次男	行田団地商店会会長	名誉会長

（2）協力機関

機関名	機関の所在地	担当内容
行田団地商店会	千葉県船橋市行田3-2-13	会場の提供
NPO法人行田ジャングルクラブ	千葉県船橋市行田3-2-13-103	全体調整事務局
行田ジャングルクラブＯＢ会	千葉県船橋市西船2-2-21	全体のサポート
行田西小学校放課後ルーム父母会	千葉県船橋市行田3-4-1	企画推進
行田東小学校放課後ルーム父母会	千葉県船橋市行田2-4-1	企画推進
法典西小学校放課後ルーム父母会	千葉県船橋市上山町1-111-5	企画推進
行田保育園父母会会	千葉県船橋市行田3-1-2	企画推進
船橋自然体験クラブ	千葉県船橋市山手2-13-33	事務局補助

（3）事務担当者（文部科学省との連絡担当者）

氏　名	所属・役職	連絡先
栗原　潔	行田ジャングルクラブ理事 船橋自然体験クラブ代表	住所　千葉県船橋市行田3-2-13-103 電話・ＦＡＸ　047-411-7844 Ｅ－ｍａｉｌ　gakudou@gyouda.com

2 実施プログラム報告

プログラム内容	プログラム番号
「三世代交流広場」	プログラム①
遊びの技の見本市	
・　紙飛行機、ﾍﾟﾝｼﾙﾊﾞﾙｰﾝ、剣玉	プログラム②
・　長縄とび、王取り、凧、剣玉	プログラム③
・　生き物観察、簡易測量、凧、ベーゴマ	プログラム④
・　Ｓケン、元大中小、ねんぼ、やっとこ	プログラム⑤
協働イベント	
・　協働りバザー	プログラム⑥
・　餅つき大会	プログラム⑦
子どもモノづくりマイスター養成塾	プログラム⑧
地域文化の伝承会	
・　布ぞうり	プログラム⑨
・　たくあん干し	プログラム⑩
・　たくあん漬け	プログラム⑪
・　書初め	プログラム⑫
・　房総太巻き	プログラム⑬
・　あんこう吊るし切り	プログラム⑭
フィールド活動	
・　デイキャンプ	プログラム⑮
・　稲作　稲刈り	プログラム⑯
・　稲作　脱穀	プログラム⑰

実施プログラム報告①　三世代交流広場

日時	＜以下水曜、土曜　14時～16時　のべ51回＞ 9月／3日　6日　10日　13日　17日　20日　24日　27日 10月／1日　4日　8日　11日　15日　18日　22日　25日　29日 11月／1日　5日　8日　12日　15日　19日　22日　26日　29日 12月／3日　6日　10日　13日　17日　20日　24日 1月／14日　17日　21日　24日　28日　31日 2月／4日　7日　14日　18日　21日　25日　28日 3 月／4 日　7 日　11 日　14 日　18 日
場所	千葉県立行田公園　東側中央広場
参加者数	1 回あたり　子ども 20 名から 30 名　　保護者 10 人から 20 人

活動内容と参加者の様子

毎週２回（候補は水曜日の放課後と土曜日の午後 2 時～4 時）にドッチビー、ゴムとび、竹馬、コマ回し、輪投げなど体を動かして外で遊び、体力づくりをする機会をつつくった。

運営スタッフは、熟年世代の放課後サポーターの方々が務めた。2 時前に行田ジャングルクラブにおいてある道具（竹馬 5 台、コマ板、コマ 20 数個、ドッチビーのディスク 3 個、折りたたみ式の机、のぼり旗サポーター用の帽子など）を台車に積んで運んだ。天気の良い日は行田公園の東側広場に着くと、待ちかねた子ども達がすぐに集まってくる。寒かったり、風が強い日でも、極力道具を持っていって場を開いた。

スタッフは、オレンジ色の帽子をかぶった。また、よく来てくれるお母さんたちにも同じ帽子をかぶってもらった。オレンジ色の帽子をかぶった大人がたくさんいることで、防犯上の安全性を高めた。

参加者の傾向は、曜日によって違いが大きい。

土曜日は、親子で参加する方が多く、各家族の親子が熟年世代の方々と知り合う機会になると同時に、親にとっては、自分の子ども以外の子どもと遊ぶ、または他の親とも一緒に遊ぶという経験をする場になり、住民相互のつながりをつくっていくことにつながった。

水曜日は、幼稚園帰りの母子が多く、遊びの中身も、母子で竹馬や輪投げをすることが多かった。

振り返り

地域の中心にある都市公園というオープンスペースで 2 年間続けたことによって「水曜と土曜の放課後は行田公園での外遊び」は地域の定番として認知されるようになった。それによって、遊びや文化の提供者が自分から名乗り出てくるようになった。また、遊びに出す保護者の安心感も高くなった。

プログラム①

実施プログラム報告②　第１回遊びの見本市

日時	2008 年 10 月 25 日（土）14 時～16 時
場所	千葉県立行田公園東側広場
参加者数	大人　約３０名　子ども　約７０名

活動スケジュール

14:00 行田公園東側集合　準備開始

順次　遊びコーナー開始

（けんだま、ペンシルバルーン、紙飛行機）

16:00 後片付け、解散

活動内容と参加者の様子

遊びの見本市、今回はけん玉、ペンシルバルーン、紙飛行機の３つを出店した。

けん玉は日本けん玉協会役員の丸石氏にご協力をいただいた。テーブルの上には、丸石氏がご持参されたけん玉が約１０個並べられた。早速子どもたちが興味深そうに集まってくる。丸石氏は語りかけながら難しい技をデモンストレーションして見せた。まずは大皿→中皿→小皿→剣先に収める「世界一周」という技からはじまり、「ろうそく」「つるしとめけん」などの段位技までをつぎつぎにお披露目していく。すごい技が繰り出されるたびに、子供たちの「すごい！」「やってみたい」という気持ちがわきだして、目が輝いていくのがよくわかった。参加者の中には学校等で経験したことがあり、ある程度の技ができる小学生もいたが、大半は初めてに近い初心者および幼児であったため、それぞれのレベルに応じて初心技から丁寧に指導していった。

ペンシルバルーンのコーナーは、ジャングルクラブの照屋さんが担当した。まずは基本となる犬の形からはじまり、応用のうさぎ、きりん、ライオン、花などを作っていく。１本の長いバルーンが次々に形を変えていく様に驚き、「次は何になるのだろう？」「割れないかな？」と身を乗り出す様子がとてもかわいらしかった。特に未就学児に大人気で、たくさんの幼児が興味津々で集まってきた。そのため、「つぎは〇〇を作って！」「△△をください」などリクエストに応じるのが精いっぱいで、担当者はフル回転であった。

紙飛行機のコーナーは、丸山の安藤さんが担当した。流線型のもの、イカ型のもの、羽根が大きく回りながら飛ぶものなど子ども達の要望にあわせて、一緒につくり、とばし方も丁寧に教えてくれた。

振り返り

今回の遊びはどちらかというと「技術系」に分類される種目であるため、初めて経験する子供がすぐにできるものではなかった。特にペンシルバルーンはそれが顕著で、「自分で作る」というよりは「作ってもらった」ものを手にする（完成形を手にする）ことが主となっていた。

今後も同様な機会があるのならば、講師側に補助スタッフを適宜配置し、子供自身が主体的に作る場所となるような工夫をしていきたいと思う。

プログラム②

実施プログラム報告③　第２回遊びの見本市

日時	2008 年 12 月 13 日（土）14 時～16 時
場所	千葉県立行田公園東側広場
参加者数	大人　約２０名　子ども　約５０名

活動スケジュール

14:00 行田公園東側集合　準備開始

順次　遊びコーナー開始

（長縄とび、王取り、凧、剣玉）

16:00 後片付け、解散

活動内容と参加者の様子

今回の遊びの見本市は、長縄とび、王取り、凧、剣玉の 3 つを出店した。

長縄跳びは、10 メートルの長縄を使った。10 メートルの長縄は、回すのには大人の力が必要とされるが、1 回で楽に 10 人は飛ぶことができた。ただし、遊びの見本市に参加している子どもは、幼稚園から中学生まで幅が広く、同じ縄を同じタイミングで飛ぶのは一苦労だった。

王取りは、子どもが 2 組に分かれて、相手の組の王様にタッチしてジャンケンするゲーム。相手の組には王様が誰かわからないため、追っかけたり、追っかけられたりしながら、体を動かすゲームでもある。10 数名の子どもで 3 セット行った。

凧は、ビニール袋と竹ひごで自分の凧を作り、それを飛ばして遊んだ。キャンプ用の長机を出して 1 回に 3 人ずつ作れるように設定した。幼児は保護者と一緒に作ってもらった。20 組の子どもが凧を作った。程よく風があり、足を長くした角凧であったこともあり、大体どの凧も 10 メートルくらいは上がった。

けん玉は日本けん玉協会役員の丸石さんに指導してもらった。高学年は、剣先や世界一周などの技に取り組んだ。また、幼児は、机に置いた玉に剣先を指しそのまま持ち上げるなど、幼児向けの剣玉の技もあり、剣玉の技のバリエーションの多さに驚かされた。

振り返り

12 月半ばの冬の公園で、風もあったため、体を動かして遊ぶ種目を多く取り入れた。最近の子どもは外遊びをしなくたっているとよく言われるが、それなりのお膳立てがあれば、夢中になっって遊ぶことがわかった。また、子どもと一緒に来ている大人も一緒にあそびに加わってくれたため、地域の方々が一体となって遊び集団が形成されたことが良かった。

プログラム③

実施プログラム報告③　第３回遊びの見本市

日時	2009 年 1 月 24 日（土）14 時～16 時
場所	千葉県立行田公園東側広場
参加者数	大人　約３０名　子ども　約８０名

活動スケジュール

13:00　スタッフ集合、準備

14:00～16:00　生き物観察、簡易測量、凧、ベーゴマ

16:00 後片付け、解散

活動内容と参加者の様子

＜活動内容＞

- 生き物観察　春を待つ動植物の様子を観察する。
- 簡易測量　体の部分の長さを使って、距離・高さを測定する。
- 凧　ビニール袋と竹ひごで、凧を作成する。
- ベーゴマ　ベーゴマを回す

＜参加者の様子＞

- 生き物観察　肌寒い中、植物を中心に観察を行った。
- 簡易測量　地面の距離の測定し、その応用で木の高さを測定したが。学校でもあまり取り上げられていないテーマなので、多くの子どもが興味を示した。
- 凧　非常に人気が高かった。屋外でもあり、同時に大人数でできないので、かなり待つ状況だったが、20 人の子どもが凧を手作りした。
- ベーゴマ　普通のコマが回せる子どもでも、ベーゴマはかなり難易度が高いので、高学年を中心に粘り強く取り組んでいた。

振り返り

- 非常に寒い日だったが、多くの児童、保護者が参加した。やはり、ゲームや TV 以外の「遊び」に対する興味・関心が高いと感じた。

プログラム④

実施プログラム報告⑤　第４回遊びの見本市

日時	2009 年 2 月 21 日（土）14 時～16 時
場所	千葉県立行田公園東側広場
参加者数	大人　約２０名　子ども　約５０名

活動スケジュール

13:30 行田ジャングルクラブ集合　打ち合わせ　遊具等運び出し　現地設営

14:00 参加者の動向を見ながら各プログラムを随時実施

16:00 終了　撤収作業

活動内容と参加者の様子

今回の企画は、『元大中小』『S ケン』『ねんぼ』『やっとこ』の四種。

【元大中小】･･･地面に田の字（3m 四方程度）を描く。それぞれのマスに一人ずつ入り、ボールを叩いて地面にバウンドさせながら回していく遊び。『元』は元帥の意で、他の 3 字とともに位階を表す。ボール回しに失敗すると降格する。シンプルな遊びだが、だからこそ遊びの中での子どもたち自身による工夫がでてくる。今回は、ボールの弾みが悪かったので、すぐにあそび方が変わり、ボールを叩きつけるのではなく、レシーブするようになった。また、それぞれの呼称（元帥・大将・中将・少将）も馴染みが薄いからか、いつの間にか変更され、『社長・部長・課長・平社員』になり、『平社員』はさらに『派遣』に変わった。この辺りのネーミングセンスはいかにも世相を反映している。最下位（つまり少将）の位置にいる子は、失敗すると周りで順番待ちしている子と交代になる。その為、入れ替わりが頻繁で、さまざまな面子で遊びが進行する。メンバーが固定させない遊びとして適している。

【S ケン】･･･昔ながらの体を使った遊び。体当たりなどもあるが、お互い片足で動いているので、それ程強い衝撃は伴わない。こうした遊びは、押すの腕の使用やケンケンの仕方で細かいローカルルールが発生しやすいものだが、ローカルルールは、固定メンバー（遊び仲間）の間で徐々に醸成されていくものである。本プログラムは不特定多数（定期の『行田公園で遊ぼう』の常連もいるが）に向け設定されたものである為、予め適当なルール（基本形）を用意した。また、よく知らないもの同士による接触を前提とした遊びである為、力加減などで無理な行為がなされないよう、他の遊びよりも注意した。

【ねんぼ】･･･行田で生まれ育った方が、幼少期にしていた遊び。二股の枝の先端を尖らせ、地面に投げつけ刺すもの。この遊び自体は恐らく全国的にみられるものだが、『ねんぼ』と云う呼称はローカルなもので、こうしたところにも地域色が表れる。木とは云え、鋭利なものなので「人に向けない」等、遊ぶ際には特に諸注意を要した。ブースも他の遊びからは離して、安全を確保した。地面に刺すにはコツがいることと、地面（土）の状態により刺さりにくいことがあるので、当初想定していた「勝負」（地面に刺さっている相手の棒を倒す）にはなかなか至らなかった。

【やっとこ】･･･工具の『やっとこ』状の乗り物。乗りこなすには竹馬のように重心移動のバランスが必要。上達者は、小走り程度の速さで乗ることもできるが、今回初めてやっとこに触れたと云う子どもがほとんどで、はじめの一歩で苦戦する姿がよく見られた。その内に、左右交互に動くのではなく、やっとこごとジャンプした方が進みやすいことが発見され、奇妙に乗りこなす子も現れた。こうした遊び方も、やっとこ製作の段階で、強い負荷にも耐えられるようにしていたので問題はなかった。

振り返り

集団遊びの『元大中小』と『S ケン』は、定期の「行田公園で遊ぼう」で定番の遊びになっているドッヂビーで遊んでいた子どもたちを中心に呼びかけ集めた。集団遊びでは（中身にもよるが）、ある程度の人数（規模）がないと盛り上がらないばかりが、遊びとして成立しにくいことがあり、また、多人数で遊んでいると、周りの子どもたちも惹きつけられるので、集団遊びの「場」としては良好だった。

一方の『ねんぼ』『やっとこ』は、少人数あるいは個人で楽しむ遊びで、一旦はじめると、他のことには目もくれず、ひたすら集中する子どもの姿が見られた。

性質の違う遊びをそれぞれ用意したことで、子どもの好奇心の幅に応じられた。

プログラム⑤

実施プログラム報告⑥　協働バザー

日時	2008 年 11 月 2 日（日）10 時～15 時
場所	行田団地商店街前広場
参加者数	大人　約２００名　子ども　約３００名

活動スケジュール

１０月１１日　事前打ち合わせ　ポスター作成の分担　バザー品の献品受け付け開始

１０月１２日～１１月２日　各参加団体で準備

１０月２０日　近隣のマンション掲示板や商店に告知のポスター掲示

１１月１日（土）献品の整理、値付けなど。

１１月２日（日）10:00　各団体のスタッフ集合

11:00～15:00　販売

活動内容と参加者の様子

＜活動内容＞

- 地域の１保育園、３小学校の保護者とその子供たち（乳幼児～中高生まで年齢の幅が広かった）、総勢約 500 人の協力を得て、バザーの献品～仕分け・値札付け～販売までを実施した。
- バザー開催の当日は、保護者を中心に２～３時間単位の交代制で接客・販売を担当。大人 50 人～60 人程度、子供 20～30 人の総勢 70～80 人が販売員として参加。
- 顧客対象は、行田団地周辺住民や行田公園・行田商店街へ来た人たちで、その層は老若男女と幅広い。多い時で 60 人～70 人の顧客が商品を見て楽しんでいた。
- 取扱商品はベビー用品から中学・大人用までバラエティに富んでいたことから、見る・手に取る商品の品揃えが多く、顧客の滞在時間は長い傾向。

＜参加者の様子＞

- 商品説明や顧客との交渉等、マニュアルのない対話が飛び交い、さらに、日本語がカタコトな外人の接客など、臨機応変な対応が必要だが、子供も大人も特に問題が生じることなく、楽しく助け合いながら応対ができた。
- バザー活動をすることにより地域コミュニティが発生し、買物顧客や販売員同士の、年代の異なる、さらには言葉の違う“異組織交流の場”も設けることができた。
- さらに、日頃仕事等で比較的交流が難しい父親の参加も多くあり、バザーを通じた家族交流場面も見られた。

振り返り

- 保育園－小学校－中学校と、普段の生活の中で接点が少ない組織と共同でバザーをすることによって、年代の異なる組織の交流が実現できた。このような活動は、保育園児は小学校に、小学生は中学校への親しみが大きくなり、自然に自分の近い将来を感じられる、よい機会だった。
- さらに、異なる環境の保護者が交わることで、生活情報はもちろんのこと、教育関連の情報交換ができて、日常生活で地域との接触が少ない働く親のサポートにもなった。
- 保育園～中学生まで幅広い世帯からの献品だったことから、商品アイテムが広く、結果、幅広い層へ満足いく販売ができた。

プログラム⑥

実施プログラム報告⑦　餅つき大会

日時	2009 年 2 月 1 日（日）10 時から 13 時
場所	行田団地商店街前広場
参加者数	地域住民約 500 名

活動スケジュール

１０：００　商店街前広場に集合、準備

１０：３０　力士迎え、到着

１１：００　もちつき開始

１３：００　終了　片付け

活動内容と参加者の様子

まず、商店街前の広場に杵、臼、テーブル、ガスコンロ、セイロ等を設置し、会場をつくる。学童の中では、餅の小分け作業台をつくり、味付け用のきなこ、のり、納豆、しょうゆ、だいこんおろしを準備する。

餅をつく力士として、近隣の松ヶ根部屋から、若樫固（わかけんご）、松谷、片桐（市川市出身の郷土力士）の 3 名が来ていただいた。

寒い中、まわし姿の力士による餅つきは力強く豪快で、多くの人が集まった。子どもたちは初めてまじかに見る「お相撲さん」に興味津々の様子であった。

最初の臼がつきあがる頃には、餅を待ちきれない人の列ができていた。

その後は、子どもたちにも餅つきを楽しんでもらい、実際に杵を持たせてついてもらった。

餅つきのとなりでは、力士に子どもたちがお相撲を挑んでいたり、抱っこしてもらって、記念写真を撮ったりして楽しく遊ぶことができた。

振り返り

事前に小学校を通じて地域に案内チラシを配ることが出来たので、予想以上の人出になり、商店街にも活気をもたらすことが出来た。

運営上では、もう少し早めにもち米を蒸かしておいて、餅をはじめについておけば、餅を求める人を待たせる時間を少なくできただろう。

子どもたちにとっては、めったにできない経験なった。

実施プログラム報告⑧　子どもモノづくりマイスター養成塾

日時　作成物物	12 月 6 日(土)13 時～15 時	工作台
	12 月 13 日(土)13 時～15 時	ノコギリの柄
	12 月 20 日(土)13 時～15 時	凧
	1 月 17 日(土)13 時～15 時	竹箸
	1 月 24 日(土)13 時～15 時	竹とんぼ
	1 月 31 日(土)13 時～15 時	枝笛
	2 月 14 日(土)13 時～15 時	竹笛
	2 月 21 日(土)13 時～15 時	道具箱(1)
	2 月 28 日(土)13 時～15 時	道具箱(2)
	3 月 7 日(土)13 時～15 時	自由工作
場所	行田ジャングルクラブ施設 1 階	
参加者数	小学校 5, 6 年生 11 名	

募集活動

- 近隣の 6 つの小学校で高学年全員にチラシを配ってもらった。
- 募集要綱に以下の点を明記し、それなりの覚悟を持って参加申込をしていただくようにした。
  自らが手を動かし、根気強く取り組まないと、各日程の製作物は完成しません。お子様の「行きたい」「作りたい」という気持ちがないと、たとえ参加しても、長続きしません。お子さんとよく相談をして、参加を検討してください。道具の使い方はしっかり指導しますが、小刀などで手を切ってしまうことはあるかもしれません。道具を使えるようになる過程としてご理解ください。(傷害保険に加入しています。)
- 18 名の応募があり、定員をオーバーしたため 4 年生 7 名は参加を見送った。

活動内容と参加者の様子

- 参加した 11 名の子どもは、10 回の会合を連続して参加した。出席率は高く、1 番休みの多い子どもでも 3 回だけであった。
- 1 日で 1 つの製作物を完成させた。子どもによって、製作の時間に差はあったが、時間内に終わらない子どもは、残って完成させたり、次回に早く来て完成させた。
- 使用する工具は、貸与し、材料は全体で用意した。

振り返り

- 10 会合連続参加の工作教室「子どもモノづくりマイスター養成塾」を行ったことで、参加した子どもたちは少しずつ手技を身につけていった。小刀やのこぎりなどの刃物の使い方は子ども自身も上達していることを実感でき、テレビゲームに代表される刹那的な遊びとは違い、五感を駆使し時間をかけてじっくり取り組む「手技」の面白さが伝わった。

プログラム⑧

実施プログラム報告⑨　布ぞうり作り

日時	2008 年 8 月 23 日（土）10 時～12 時
場所	行田ジャングルクラブ施設 1 階
参加者数	小学生１１名　保護者７名

活動スケジュール

10:00 行田ジャングルクラブ集合

10:05 指導者紹介、作業説明、ぞうり作りにちなんだ生活体験話

10:20 作業開始

12:00 終了

活動内容と参加者の様子

地元在住の指導者から、昔ながらの布ぞうりの作り方を伝授してもらった。作業に先立って、指導者からは、布ぞうりの特徴（わらぞうりに比べ、耐久性がある、足になじむ）の他、幼少時（昭和初期）の地域の様子、生活風景などについてもお話いただいた。

作業は、参加者各自に用意してもらった布きれと、主催者側で用意したビニール紐を使ってぞうりを編んでいく、比較的単純なもの。指導者にはぞうり作り用の器具（板に数本の棒が付いているもの）を用意していただいたが、参加者数分には足なかった。しかし、その器具がなくても足の指で代用でき、また、その方が、昔ながらの雰囲気がでていた。

ぞうりの編みこみ自体は、単純な作業の繰り返しだが、要所によっては編みこみ方で迷う場面があり、指導者に巡回していただいた。また、親子でそれぞれ作っていると、親の方が夢中になっていることもあった。

身の回りの生活具は、使いながら直し、直しながら使うもので、また、ぞうりのように人それぞれサイズが異なるものならば、自ずと鼻緒の位置や全体のバランスも異なり、それぞれが使いやすいように考えながらつくるものだが、参加者には「完成品（見本）」の通りに作ろうとする傾向が見られた。

振り返り

事前に、布ぞうりの材料とする布切れを持参するように参加者には案内を出していたが、どういった生地が適しているかについては特に触れなかったので、参加者の中には、編みにくい生地を持ってきてしまい、少し難儀している方もいた。

指導者には、順次見回って、全体の作業に気を配っていただいたが、作業の進捗にバラつきがあって、指導者になかなか来ていただけない参加者がでていた。運営スタッフが事前に作り方をマスターして、指導者をサポートできていれば、作業がもっとはかどったはずである。また、今回は参加者に床の上の適当な場所に座って作業していただいたが、車座に座っていただいたほうが、指導者も見回りやすく効率的であった。

教室開催を子どもの夏休みに合わせて設定したことについては、好評をいただいた。夏休みの宿題の自由研究として、布ぞうりに白羽の矢を立てた家庭が多かったようだ。

今回の布ぞうりづくりは（実際に使用するかどうかは個人の判断としても）、生活具として使って作って使っていただきたいと考え企画した。先に触れた通り、直し直し使っていくものなので、その点をもう少し強調し、繕い方についてもきちんと時間を割いてご指導いただくべきであった。

プログラム⑨

実施プログラム報告⑩　たくあん干し

日時	2008 年 12 月 6 日（土）10 時～11 時
場所	行田ジャングルクラブ施設 1､2 階
参加者数	子ども５名　大人１２名

活動スケジュール

10:00 行田ジャングルクラブ集合　作り方説明
10:15 たくあん用大根配布
10:20 大根を２本づつ束ねる
10:45 施設２階ベランダに天日干し作業
10:55 後片付け、

活動内容と参加者の様子

伝統文化伝承活動の第２弾はたくあんづくり。地元船橋でたくわん作りに造詣の深い関口氏を講師に迎え、小学生５名とその兄弟姉妹、保護者、関係者等が集まった。

今回用意するものは、たくあん用大根約３０本、荷造り用ロープ（適量）のみ。

まず、大根を２本ずつまとめて、葉のつけ根付近をロープで縛りあげていく。力一杯縛ると、葉っぱそのものが切れたり折れたりしてしまう。縛り方がゆるいと、つるしたときにほどけて大根が落ちてしまう。ちょうどよい力加減をマスターするのに参加者一同は四苦八苦していた。

縛り終えた大根は、施設２階のベランダの物干しに順番に並べていった。冬の日差しに照らされた大根はきれいに光り輝いて見えた。おいしいたくあんができますように。

振り返り

今回は法典西小と行田西小からからの参加が中心だった。作業内容からしてちょうどよい人数だったと思う。

作業そのものは「縛る」だけの単純作業で案外簡単だったが、それだけに奥が深い。特に小学生にとっては日常生活での経験がものをいうことになる。普段から靴ひもを結ぶ、古新聞を縛る、などの手先を使う動作を多くしている子供は、やはり手際がよかった。

物干しで雨を避けて風にさらすこと約２週間。程よく水分が抜けて、漬け樽に入るように柔らかくなるころがちょうど良いタイミングである。日が経つにつれ、緑の葉っぱが黄色く枯れて白い大根の表面がしわしわになっていく。その様子を毎日観察しながら、「そろそろかなあ？」「まだだよね」と大根の話題に花を咲かしている子供たちであった。

実施プログラム報告⑪　たくあん漬け

日時	2008 年 12 月 23 日（祝）10 時～11 時
場所	行田ジャングルクラブ施設１階
参加者数	子ども５名　大人１２名

活動スケジュール

10:00 行田ジャングルクラブ集合　作り方説明

10:15 ぬか・塩の混ぜ合わせ

10:20 葉の切り落とし

10:30 漬け込み開始

10:55 後片付け、

活動内容と参加者の様子

待ちに待ったたくあんの漬け込み作業の日を迎えた。今回も講師は地元の関口氏。

用意したものはベランダで干された３０本の大根、塩、ぬか、鷹の爪、そして漬け樽、漬物石。

まずは米ぬかと塩を混ぜ合わせていく。皮膚の弱い人は手が荒れるとのこと。ここは講師の先生にお任せする。

次に干しておいた大根を持ってくると、程よく水分が抜けて元の太さの３分の２ほどになっていた。表面は深いしわが入り、全体的にしんなりと柔らかくなっていた。ちょうど「つ」の字の形に折り曲げることができるくらいの柔らかさであった。

そして、その大根の葉を包丁で落としてから、いよいよ樽の中に投入していく。

まずは、樽の底に先ほど混ぜ合わせた糠を敷き詰め、その上に大根を隙間なく詰めていく。

これを順次繰り返し、樽一杯に 4 段重ねにする。人によっては柿の皮を入れたり、ザラメや昆布を加える人もあるという。それぞれの家庭のやり方があり、家庭の味があるのだろうと思うが、今回はシンプルなやり方に徹してみた。

すべて大根を並べた後、最後に表面には切り落とした葉を敷き詰めて蓋をし、漬物石を乗せて完成。

玄関脇の涼しい場所において、じっと待つ。あとは麹の力を信じておいしい漬物ができるのを待つのみだ。

振り返り

年明け、1 月後半に１本とりだして試食してみた。少しスジっぽい歯ごたえのあるたくあんができていた。塩分は抑え目で、たくあん単体で食べてもおいしいものができた。。

地域の会合がるごとに、もれなく自家製たくあんを配布した。評判は上々で、初めてにしてはよくできていたと思う。

昔はどこの家庭でも当たり前に行っていた漬物作りではあるが、現在はこのような機会がないことにはなかなか経験できないものである。ぜひ来年以降も文化継承を続けていき、「家庭の味＝ジャングルの味」を作っていきたい。

プログラム⑪

実施プログラム報告⑫　書初め

日時	2009 年 1 月 5 日（日）10 時～12 時
場所	行田ジャングルクラブ施設 1 階
参加者数	子ども　８名

活動スケジュール

１月５日　　9:30　スタッフ集合
　　10:00～12:00　書初め
　　12:00～12:20　後片付け

活動内容と参加者の様子

大人の社会は手で文字を書くこと自体が減っているが、今でも子どもの世界では鉛筆で書くことは以前とは変わらない。字は人をあらわすと言われるように、文字にはその子どもひとり一人の個性が凝縮されていると今でも日常的に感じることができる。特に毛筆は、その子どもらしさが端的に出て、見る者を楽しませてくれる。

小学校冬休みの宿題のひとつに書初めがある。通常は自宅で数枚練習をして、清書して提出するということになるが、そこを専門家から習う場をつくり、みんなが一緒に書初めをすることで、正月の行事として位置づけてみたのが今回の取り組みである。

まず、地域交流スペースの 1 階をブルーシートで覆った。墨がフローリングの床についてしまうのを避けるためだ。集まった子どもは 8 人。小学校の高学年が中心だ。学校でお習字の時間があり、書くことには慣れていても、書初め用の大きな紙に書くのは、1 年に 1 回だけだろうか。先生から、紙を折って中心線をつけて、字の真ん中がずれないように書くことの指導を受ける。

思い思いに練習を始める。やたら書くのが早い子ども、じっくり１字１字手本を見ながら書いていく子どもなど様々だ。３枚くらい書いて飽きてしまったのか、他の子どものところに行って無駄話を始める子どももいた。とはいっても学校に提出するものを作り上げないとこの日の書初めは終わらない。

先生には、巡回しながら子どもに個別指導をしていただいた。

11 時半を過ぎて、全員が清書に入り、12 時には全員が学校に提出する作品をつくることができた。

振り返り

先生曰く「筆使いなどは、すぐに身に付けられるものではないので、字の骨格ができれば良しとした」とのことだった。

その時のその子どもにはたまたま 2 時間の活動にしか過ぎないかもしれないが、毎年繰り返すことによって年 1 回の正月の行事として、季節感を大切にしその中で生活していくというベースになるのではないだろうか。

プログラム⑫

実施プログラム報告⑬　アンコウの吊し切り

日時	2009 年 2 月 28 日（日）16 時～19 時
場所	行田ジャングルクラブ施設 1 階
参加者数	大人　約２０名　子ども　約３０名

活動スケジュール

２月２８日　15:00　スタッフ集合

16:00～17:30　鮟鱇の吊し切り

19:00～20:00　試食

活動内容と参加者の様子

＜活動内容＞

- アンコウ　３匹の吊し切り
- 湯通ししたアンコウの身の部分・皮の部分などを試食

＜参加者の様子＞

- １匹目は指導者がさばき、２～３匹目は参加者が協力してさばいた。
- アンコウそのものを間近で見るのははじめての人がほとんどで、さらに、吊し切りとなるとかなり珍しい様子で、カメラやビデオ持参の人は、珍しい映像を撮っていた。
- よく砥がれた包丁を使って、補助役と息のあったさばきにて、ほとんど捨てるところもなく、一匹目の解体が終わった。
- 二匹目の吊し切りは、参加者が挑戦。いきなり、素手であんこうのとがった小さな歯に触れ、出血の洗礼をうけたが、指導者の力を借りてなんとかすべての部位の解体が終了した。「なんともつかみどころのないことが、こんなにやっかいとは思わなかった。」との感想である。
- アンコウの肝と味噌をあわせたタレで、身の部分、皮部分などそれぞれの部位の食感の違いを確かめながら楽しく試食ができた。

振り返り

- アンコウの吊るし切り自体を見ることが珍しく、興味深い取り組みだった。
- 子どもたちに素手でふれる機会を増やせればと思う。
- 子どもたちにとっては少し異質な食べ物に映ってしまい、試食は進まなかった。

実施プログラム報告⑭　房総太巻きづくり

日時	2009 年 2 月 28 日（日）17 時～20 時
場所	行田ジャングルクラブ施設 2 階
参加者数	大人　１５名　子ども　１５名

活動スケジュール

２月２８日　17:00　スタッフ集合
19:00～20:00　太巻きづくり
20:00～20:30　試食

活動内容と参加者の様子

房総太巻き寿司は千葉県の産物である海苔と米を使い、房総半島南部の、旧上総地方（市原、長生、君津、山武）で、冠婚葬祭や、地域の集まりのごちそうとして作られてきた。昭和の初めに海苔が一般に普及されようになったため、戦前からいろいろな具材を芯にして巻く方法で、家庭や地域で作られ、戦後、豊かな時代に入り、巻き方がさまざまに工夫されるようになり、花、動物、文字、キャラクターなど、多彩な巻き方が、創造されていいる。

今回取り組んだのは、バラとリューリップ。櫻でんぶや花おすしの素を用い桃色に染まったご飯が花びら、茎は野沢菜を使用した。まず、かけすに海苔を広げ、その上に薄く寿司飯を置いていく、ここからが本番、バラやリューリップの花びらになる桃色のご飯を足していく。ここがうまくいかないと、味は変わらないが、花には見えない。ご飯を多く使いすぎ、超極太の太巻きにしてしまった子どもが半分くらいいた。のりからはみ出してしまったご飯も、また海苔を追加すれば、姿だけは見えなくなった。子どもは１人１本ずつ作ったが３升近くたいた米がなくなってしまったことからすると、１本に 1.5 合以上の米を使っている。

最後に、つくった太巻きを包丁で切ったが、出てきた絵柄は、バラといえばバラに見えるといったもの。しかし、自分でつくった太巻きの味は格別だった。大勢でつくり、大勢で食べて、あたかも 30 人の大家族のような賑わいだった。

振り返り

最近では、ごはんを主食にした、日本型の食生活のよさが見直されている。栄養価の高い海苔、酢を使い、千葉産の米を使った房総太巻き寿司も、地産地消、米消費の拡大という点で、再評価されている。また、「食育」のテーマのひとつである郷土料理の伝承という面でも注目され、次世代へ是非伝えて生きたい食文化だと思う。

プログラム⑭

実施プログラム報告⑮　デイキャンプ

日時	2008 年 11 月 23 日（日）9 時～14 時
場所	船橋市法典西連合会館・上山公園
参加者数	大人　約３０名　子ども　約５０名

活動スケジュール

１０月１１日　事前打ち合わせ　各団体で参加者集約
１１月　８日　食材の手配、資材運搬の手配
１１月２２日　食材購入
１１月２３日　9:00　各団体のスタッフ集合
10:00～11:30　レクレーション（王取り）
11:30～12:30　昼食
12:30～14:00　レクレーション（ドッチビー）

活動内容と参加者の様子

＜活動内容＞

- ジャングルクラブと３小学校の放課後ルーム父母会の共催行事
- 昼食は、田んぼで収穫した新米でのおにぎりを、子ども自身が作る。豚汁と芋煮を保護者が作成。
- レクレーションは、「王取り」（鬼ごっこの一種）とドッチビー

＜参加者の様子＞

- 普段は交流のない４つの団体に属する児童なので、導入は団体対抗でのゲームとした。
  最初は、ぎこちなかった関係も、最後には打ち解けていた。
- 米作りから参加している児童には、関わり方の差はあるものの、収穫した米が「おにぎり」になったことに感動していた。
- 初めて「おにぎり」を作る子には、上級生がアドバイスするなど、子ども同士の関わり合いも深めることができた。
- ジャングルクラブの３０周年記念事業も同時に開催し、１０年前のタイムカプセルを開封した。小学生も興味を示したので急遽「寄せ書」を行い、１０年後に集まることとした。

振り返り

- 参加回数の多い子も初参加の子も、それぞれに楽しめる内容が用意できたと思う。
- 高学年自身が企画し、運営するような場面を増やしていきたい。

プログラム⑮

実施プログラム報告⑯　稲作１

稲刈り

日時	２００８年９月２３日（土）１０時～１４時
場所	船橋市金杉谷津田（馬込霊園近く）
参加者数	子ども２０名　大人２０名

活動スケジュール

１０：００　各自現地集合
１０：０５　稲刈り及び稲干し(乾燥)の手順説明
１０：１５　稲刈り開始　（同時に一部保護者は刈った稲を束で結ぶ作業）
１１：００　稲干し用の枝木を収集するため山へ　男性保護者
１１：３０　刈り取った稲を枝木に吊す。
１２：００　作業終了
１２：３０　懇親会
１４：００　解　散

活動内容と参加者の様子

各自現地に長靴や汚れてもいい服装を持参し集合。子供たちも田んぼで稲刈りを行うのが、大変楽しみの様子である。稲刈り及び稲干し(乾燥)の手順説明後、作業開始。

子供達は最初一生懸命に稲刈りを行うが、田んぼからザリガニやカエル等が現れると稲刈りはそっちのけで遊んでしまう。

そのようなことを繰り返しながら、稲刈作業は進んでいった。また、稲刈と同時に一部保護者は刈った稲を束で結ぶ作業を平行して行った。

また、男性保護者は、稲干し用の枝木を収集するため山へ参上。

刈り取った稲をすべて束ねた後、収集した枝木を田んぼの中に建て稲を吊した。

実施プログラム報告⑰　稲作２

脱穀

日時	２００８年１０月４日（土）１０時～１２時
場所	船橋市金杉谷津田（馬込霊園近）
参加者数	子ども１０名　大人８名

活動スケジュール

１０：００　各自現地集合

１０：０５　脱穀作業の手順説明

１０：１０　脱穀作業開始　（昔ながらの脱穀機にて脱穀作業）

１１：３０　脱穀した米を袋詰め。

１２：００　作業終了

活動内容と参加者の様子

各自現地に集合。脱穀の予定日が天気の関係で本日に延期。こればかりは、自然現象のため仕方がないと話をする。

稲が乾いていないと脱穀は行えないことを子供達も認識した様子である。

脱穀の手順説明後、作業開始。脱穀の方法は昔ながらの足踏み脱穀機を使用。

子供達も毎日食べているお米が、このように手間をかけ食卓に並ぶことを肌で感じたようである。

脱穀作業は、大人が脱穀機を足踏みし、子供が稲を落とすという共同作業で行った。

現代の農家は、トラクター等の機械化による収穫のため、我々が行っている、田植えから脱穀まで、すべて手作業で行うことを経験できることは、本当に貴重な体験であり、今後も、田んぼ作業を継続し、なるべく多くの地域の児童に体験させたいと思う。

振り返り

参加は、船橋市学童保育ジャングルクラブ児童及び行田東・行田西・法典西小学校放課後ルーム児童、行田公園の遊びによく来ている子どもたちとその保護者だった。田植えの時と引き続き参加した方がおり、それぞれが声を掛け合い、役割を分担して、順調に作業ができた。地域を基盤にして、複数の団体に属する保護者が協働する機会はほとんどない。そういった上では貴重な機会であった。また、子供達は、金杉の田んぼで自分達で育て収穫した新米をおにぎりにして食べる予定を楽しみな様子であった。

この報告書に関するお問合せ先
船橋行田放課後対策実行委員会 住所　千葉県船橋市行田3-2-13-103　行田ジャングルクラブ内 電話・ＦＡＸ　047-411-7844 Ｅ－ｍａｉｌ　gakudou@gyouda.com